

God With Us

Part 3: A King in place of THE KING.
1st and 2nd Samuel

Message 9 – David's Faith Fails
1 Samuel 27-30

神は我らと共に

パート3：王（神）に代わる王

サムエル記第一・第二

メッセージ9 – ダビデ、信仰につまずく
第一サムエル27-30章

はじめに

聖書は、ダビデの人生のスナップ写真を用いて、私たち自身の信仰の歩みを励ましてくれる。17章では、ダビデは偉大な信仰をもって巨人ゴリアテを倒した少年であった。しかし、21章では、ダビデは大祭司に嘘を言い（祭司一族を死に導く）、ペリシテ人領土に逃げた（狂人の振りをしてその場から逃れた）。23-26章では頻繁に祈り、賢明な助言に厳密に従い、サウル王の命を二度惜しみ、神の保護の内に避けどころを見出した。そして、これから見ていく27-30章では、ダビデの信仰が成長に疲れていく。十年近くもサウルから逃亡し続けた「神の御心の男」ダビデは最下点に到達し、再びイスラエルにとって一番の敵であるペリシテ人に避けどころを求める。信仰の歩みは決して一直線の道ではない。沢山の浮き沈みがある。

ダビデ、ペリシテ人の領土へ逃れる： 27：1-7

ダビデは心のうちに言った、「わたしは、いつかはサウルの手にかかって滅ぼされるであろう。早くペリシテびとの地へのがれるほかはない。そうすればサウルはこの上イスラエルの地にわたしをくまなく捜すことはやめ、わたしは彼の手からのがれることができるであろう」。（27：1）

たとえ最も敬虔な人であっても、信仰の成長が弱り、神のご臨在が遠く見え、また、神の約束が嘘のように感じられる時がある。そんなとき、私たちには選択の余地がある：神に向かい、強めていただき、抜け道を与えていた

だいたり、または、自分の中に力を見出し、自力で逃げ道を考え出すことが出来る。ダビデは後者を選んだ：ダビデは、神の約束も過去の神の保護の証も投げ捨てた。ダビデはこの決断について祈ることに怠り、むしろ、「自分に言った」。ダビデが主に問うていたなら、神の方向と保護を与えられているであろう。皮肉なことに、ダビデは、巨人ゴリアテの故郷ガトに移った。ここで、ダビデはゴリアテの剣を身に着けて、ゴリアテの町を歩き、ゴリアテの王のために戦っている。ダビデは、かつて、神であるヤハウエの御名によって勢いよく立ち向かった相手そのものである新たなペリシテ人の支持者になったのです！

私たちは、自分の信仰が成長に疲れているときを見極める、自己認識の練習を積む必要がある。自問する：どうやってここにたどり着いたか？神への情熱の炎を燃やし続けるために十分な時間を費やしているでしょうか？誰に私の人生に語り掛けることを許し、その責任を負っているでしょうか？今、あなたの信仰の成長が疲れていることに気づいておられるなら、その状況から抜け出すための方法を自分の内に探すことを防ぐためにどのような手順をとっておられるでしょうか。その第一ステップは神の指示であるべきである。また、信頼できる友だちに祈ってもらいましょう。

取り敢えず、ダビデの選んだ方法は目的を達成したかのように見えた：

ダビデがガテにのがれたことがサウルに聞えたので、サウルはもはや彼を捜さなかった。（27：4）

神の道からそれ、我が道をいくとき、通常、魅力的な考えのように思われ、しばらくは順調に行ったかのように映る。しかし、結果的にその方法は高きつく。人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある。（箴言14：12, 16：25）短期的には、ダビデの決断はことを解決したかのように見える。しかし、何か月も経ち、神の傘の保護下の外へ出たダビデは高いコストを支払わなければならなかった。

ガトにおいて不特定の時が過ぎ、ダビデは戦士とその家族たちとともに住むための町をアキシに求め、ペリシテとイスラエルの国境にあるチクラグが与えられた。

ダビデがペリシテびとの国に住んだ日の数は一年と四か月であった。（27：7）

16か月である。最終的に、私たちが貴重な教訓を学ぶために必要なだけ、神は、私たちに我が道を歩むことを許される。それでも、私たちが常に神の道を歩むように手招いておられる。

ダビデの襲撃： 27：8-12

チクラグから、ダビデとその戦士たちは、イスラエルに敵対した南部の部族に定期的に攻撃した。ダビデはアキシにイスラエルの同盟国に攻撃すると偽った(10節)。その嘘を隠すために、残酷な策略を採用することを余儀なくされた。

ダビデは男も女も生かしおかず、ひとりをもガテに引いて行かなかった。それはダビデが、「恐らくは、彼らが、『ダビデはこうした』と言って、われわれのことを告げるであろう」と思ったからである。ダビデはペリシテびとのいなかに住んでいる間はこうするのが常であった。(27：11)

以前、この種の不必要な血を流すことからダビデを留めた妻、アビガイルはこのようなダビデの冷酷な抹殺の策略によってどのような影響を受けたか想像してみましょう！ダビデはもはや彼女のような敬虔な人々から賢明な助言を聞き入れなかった。

アキシはダビデを信じて言った、「彼は自分を全くその民イスラエルに憎まれるようにした。それゆえ彼は永久にわたしのしもべとなるであろう」。(27：12)

ダビデは、サウルから逃れるために安全な避難所を与えてくれた男、アキシを深く裏切った。私たちの行動によって他の人に与える影響やその人たちの信頼を犠牲にしてしまうというところまで考えずに行動してしまうことが頻繁にある。

神から一步遠ざかるとき、大抵、また一步、そして、また一步と繋がり、間もなく想像もしなかったところまで深入りしてしまう。罪は、単に一步踏み外すだけに収まらないのが常である・・・多くの場合、間違った方向に向かって進む一連の工程の歩みである。ただちに、それが人生の軌道となる。「思考の種を蒔き、行いを刈り入れる。行いの種を蒔き、習慣を刈り入れる。習慣の種を蒔き、人格を刈り入れる。人格の種を蒔き、運命を刈り入れる。」神の御心に反する最初の「わずかな」数歩を歩み出すことが無いよう

に細心の注意を払わなければならない。その「わずかな」数歩は、あなたが想像した以上のそれ路へと導くことになり得るからです。

ダビデの苦境： 28：1-2

ペリシテ人がイスラエル攻撃を決心した時、ダビデは直ちに自分の民と闘うためにアキシに同行するよう呼び出された。ダビデはどうしてよいかわからず、曖昧な返事をしたかもしれない。

そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いくさのために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言った、「あなたは、しかと承知してください。あなたとあなたの従者たちとは、わたしと共に出て、軍勢に加わらなければなりません」。ダビデはアキシに言った、「よろしい、あなたはしもべが何をするかを知られるでしょう」。アキシはダビデに言った、「よろしい、あなたを終身わたしの護衛の長としよう」。(28：1, 2)

サウル、霊媒師を訪ねる： 28：3-25

ダビデが我が道を歩んでいる間に、神は、サウルを除去されることによってダビデの将来を整えておられたとは、何と皮肉なことでしょう。迫りくるペリシテ人の脅威はサウルを脅かし、サウルは主に相談したが、答えが無かった。そこで、サウルは霊媒師によって死んだサムエルの魂を呼び出した。サウルはイスラエルから全ての霊媒師を禁止していた。それにも関わらず、エン・ドルに霊媒師をみつけ、彼女が罰されることを恐れないために変装をして訪ねた。そして、サムエルの魂を呼び出すよう求め、霊媒師はその通りに呼び出した。サムエルは厳しく、イスラエルは敗れ、サウルもその息子たちも明日、私と一緒になろう(死ぬ)ということを通告した！

主は、わたしによって語られたとおりにあなたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。あなたは主の声に聞き従わず、主の激しい怒りに従って、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかったゆえに、主はこの事を、この日、あなたに行われたのである。主はまたイスラエルをも、あなたと共に、ペリシテびとの手に渡されるであろう。あすは、あなたもあなたの子らもわたしと一緒になるで

あろう。また主はイスラエルの軍勢をもペリシテびとの手に渡される」。
(28:17-19)

その頃ダビデは、神が、ダビデの将来の王位のために働いてくださっていたなどと想像もつかなかった。ダビデは、自力で命を管理する忙しさのあまり主権ある神の目を通して見る視力を失ってしまった。以前、ダビデはあらゆる方法で、神にはサウルを除くことが出来る言った(26:10)。そしてそのとき、実際、神はサウルを除かれようと働いておられ…また、同時に、ダビデ自身の悪い選択が招いた困難な結果を体験させようとしていた。

忍耐強さを高めることは難しい。頻繁に、直ぐにイライラしてしまい、神が私たちの人生の中で力強く動かれようとしておられるときがどれほど間近に迫っているかに気が付かない。神は忍耐深くあられる(第二ペテロ3:9) 愛の最初の性質は忍耐(寛容)である(第一コリント13:4)。御霊の実は忍耐(寛容)である。神は、私たちの足元に必要に十分な光を照らしてくださる。イライラして我が道を行くのではなく、忍耐強く神を信頼し続けることを願っておられる。

魔術について:

霊的な力の源は二つしかない—それは、神とサタンである。訴えがサタンの助けによって行われた場合、それは「魔術」であり(妖術、黒魔術、心霊、オカルトとも言われている。)、聖書で厳密に禁じられている(申命記18:10-12、ガラテヤ人への手紙5:19、マラキ書3:5、第二コリント3:3:6)。サタンとその悪霊は、神とその天使たちに対して邪悪に反する。彼らには、神の作品や方法を偽造することが可能である。サタンは人々を惑わせるために「光の天使として偽装」する(第二コリント11:14)。モーセとアロンによって行われた神の奇跡の御業の一部をパロの魔術師が真似ることが出来たことを思い出しましょう(出エジプト7:11, 22; 8:7, 18)。このようにして、闇の力をうまく活用しているふりをする行商人たちが大勢いた傍ら、実際、サタンと調和し、その邪悪な力を活用している者たちもいた(使徒の働き13:4-12)。

エンドアの魔術師の場合はサタンの力との真の接続があったとみられる(彼女自身はサタンが源である力であることを認識していなかったけれども)。しかし、サタンではなく神ご自身が、サウルに語らせるためにサムエルの霊を陰府(旧約聖書時代の死後の魂の行き場)から「上がる」ことをお許しになられたのである。霊媒師自信でさえサムエルの霊をみて怖れた理由の説明

がつく。本質的に何が起こったかということ、瞬間的に肉体の無いサムエルが「復活」したのである。神は、サムエルの霊を用いて、サウルの裁きのメッセージを送られたのである。

実用的な用語で言うと、現代的な形でオカルト(占い師、守護霊、タロットカード、ウィージー・ボード、占星術、等々)に手を出すのは賢明ではないということである。そうすることによって、あなた自身を大勢の悪霊と接触する可能性に自分自身を開放することになる(天使の中の三分の一がサタンに着いて神の御国から落とされたのですから)。もし、何らかの形で悪霊があなたを「支援」するとしたら、あなたはそれが慈悲深い霊であり、その霊が提供してくれる支援にはまってしまう可能性がある。しかし、最終的には神に対抗し、人間を奴隷として捕らえ、破壊するために屈曲しているサタンが率いる霊的存在の腕に協力しているということになる。サタンの活動は、今日でも世界の一部でよく見られます(呪術医村等...)。西洋では、サタンの戦略はもっと偽装されているが、それでも劣らず危険である。

ダビデ、ペリシテ軍から送り出される: 29:1-11

ダビデはペリシテ人の王に仕え、好調であった。しかし、イスラエルと戦うために呼び出されたことは、これまで無かった。ここで、ダビデとその軍隊は、初めてイスラエルと戦うために、ペリシテ人の軍隊に同行するよう召集されるという苦境に立った。もし、ダビデがイスラエルと戦ったら、イスラエルの将来の王になる権利を喪失するであろう。もし、イスラエルのために戦ったら、サウルの王位継続に貢献することになる、そうすると、自分自身が王位に上昇することをさらに遠ざけるであろう。

幸い、神がダビデをこの苦境から脱出させるために予期しない方法で介入された。ペリシテ人の指揮官は、霊に動かされ、ダビデの忠誠を疑問視した。その疑いのため、アキシにダビデを送り返すよう命じた。

しかしペリシテびとの君たちは彼に向かって怒った。そしてペリシテびとの君たちは彼に言った、「この人を帰らせて、あなたが彼を置いたもとの所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れないからである。この者は何をもってその主君とやわらぐことができようか。ここにいる人々の首をもつてするほかはあるまい。これは、かつて人々が踊りのうちに歌いかわし

て、『サウルは千を撃ち殺し、ダビデは万を撃ち殺した』と言った、あのダビデではないか。(29:4, 5)

このようにして、ペリシテ人がイスラエルとの戦いにむけて行進している最中に、ダビデとその戦士はチクラグにに戻った。

神のダビデに対する忠実さ： コリント人への手紙第一12章

ダビデの信仰の危機であったこの時期、神のダビデへの忠実さが際立つ。ダビデが16か月の間ペリシテ人の領土に滞在していた間、神は、ダビデの王位がついに現実したときに備えて、ダビデを助ける強力な戦士たちを大勢追加しておられた。

ダビデを助ける者が日に日に加わって、ついに大軍となり、神の軍勢のようになった。(コリント人への手紙第一12:22)

—サウルの親族の多くがチクラグでダビデに加わった：

見よ王は今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなった。わたしの子らもあなたがたと共にいる。わたしは若い時から、きょうまで、あなたがたの前に歩んだ。(12:2)

—マナセの男たちも最も驚くべき時にダビデに加わった。

サウルに対するペリシテ人との戦いに行こうとしていたときも、マナセから、何人かがダビデのところに亡命して来た。(12:19)

使徒パウロは次のように記している：「たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ2:13) 神の忠実さは、私たちの神への忠実さを超過するという事を知ることによって、私たちは非常に励まされるはずである。たとえ、私たちの信仰が弱っている時であっても、神の私たちへの愛は変ることなく、私たちに歩み寄ってくださる。私たちは、その様な偉大なる神の愛にどのように応えるべきでしょうか？神の慈愛があなたを悔改めに導くはずである(ローマ人への手紙2:4) 神の驚くべき恵みは、私たちが神から離れていくのではなく、神に向かって駆け寄ることが出来るように働きかけてくれるはずである。

破壊されていたチクラグ： 30:1-6a

ダビデとその軍隊がチクラグに戻ったとき、ダビデの全ての自力で企てた計画は、恐ろしい方法で崩壊していた。

さてダビデとその従者たちが三日目にチクラグにきた時、アマレクびとはすでにネゲブとチクラグを襲っていた。彼らはチクラグを撃ち、火をはなしてこれを焼き、その中にいた女たちおよびすべての者を捕虜にし、小さい者をも大きい者をも、ひとりも殺さずに、引いて、その道に行った。ダビデと従者たちはその町にきて、町が火で焼かれ、その妻とむすこ娘らは捕虜となったのを見た。ダビデおよび彼と共にいた民は声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなった。ダビデのふたりの妻すなわちエズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻であったアビガイルも捕虜になった。その時、ダビデはひじょうに悩んだ。それは民がみなおのおのそのむすこ娘のために心を痛めたため、ダビデを石で撃とうと言ったからである。しかしダビデはその神、主によって自分を力づけた。(30:1-6)

考えてみましょう：彼らの町は消滅し、妻も子供たちも捕虜に捕られ、従者たちはダビデの指導権に幻滅し、石で打って殺したいと思った。ダビデのこれまでの人生の中においての最下点であった(また、ダビデの二人の妻、アヒノアムとアビガイルについて記されていることにも注意しましょう。ダビデは既に、王となる者は妻を多く持つてはならないという神の命令を犯し始めていた(申命記17:17)。ダビデの王権が始まった後にも、ダビデはこのことが原因で更に神の御心から離れて行ってしまう(サムエル記第二5:13)。

ダビデは自分の業を味合わされていたのです。神には、妻も子供たちも殺されてしまうことをお許しになる事も容易に出来たはずである(ダビデが敵に繰り返すそのようにしてきたように)。しかし、ダビデに対する神の慈悲によって、生きたまま捕虜に捕えられることをお許しになられたのです。通常神は、「我々に相応しいもの」を与えられるのではない。むしろ、愛をもって、「たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。」(ヘブル人への手紙12:10)

神の慈悲とダビデの悔い改め： 30:6b-8

「しかしダビデはその神、主によって自分を力づけた。」(30:6b)。

ダビデの人生の中で、いくつも大きな間違いを犯した不完全な人間であった。しかし、ダビデの最高の性質のひとつは、神の御前に不完全さと悔い改めをするために戻り続けたというところである。ここで、従者たちに殺意を抱かせた際も、ダビデは靈的力の更新のために神に返った。ダビデが、軌道に戻ったことを示す最初の証拠は、「主に問い合わせるために」大祭司を呼び出したことである。それは16か月間ダビデが怠ってきたことであった。最終的に、ダビデは再び神を求めた。

ダビデはアヒメレクの子、祭司アビヤタルに、「エポデをわたしのところに持ってきなさい」と言ったので、アビヤタルは、エポデをダビデのところに持ってきた。ダビデは主に伺いをたてて言った、「わたしはこの軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができますか」。主は彼に言われた、「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確かに救い出すことができるであろう」。(30:7, 8)

ダビデは、神からの指示だけでなく、失われた女たちも子供たちも全てを救うであろうという慈悲深い保証も得た。

ダビデ、アマレク人を追う： 30:9-25

ダビデとその従者たちは、病んでいたためにアマレク人の君主に捨てられ、死にそうになっていたエジプト人の奴隷たちの助けによって、アマレク人を追いかけた。(30:11-15)

神は、私たちの祈りに答え、様々な方法で神の御心を満たすことができる。ダビデが祈り、悔い改めている間(30:6)、神は、ダビデがアマレク人の侵略者を追跡する助けとなるエジプト人の見捨てられた病弱な奴隷を備えてくださっていた。だれかが次のように言ったことがある：私たちが祈るとき、「偶然」が起こり始める。祈らなければ、何も起こらない。状況について祈り、神に、神の方法で、喜んで、あなたの祈りにこ応えてくださいませう。そうすることで、あなたの物語の中で、神の個人的ご臨在が保証され、神への信頼を築きます。

アマレク人に追い付いたダビデは、彼らを打ち負かし、失ったものを全て取り返した。

こうしてダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデはそのふたりの妻を救い出した。そして彼らに属するものは、小さいものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪い去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした。

(30:18, 19)

ダビデ、イスラエルの指導者たちに贈り物をする： 30:26-31

戦争の戦利品から、ダビデは、イスラエルの指導者たちに沢山の贈り物を送った。そうすることによって、ダビデはイスラエルの民が彼の心にあったこと、また、うまくいけば、将来の内にあったことを表した。箴言は、良好なタイミングで贈り物をするのは重要な扉を開くことを可能とする実用的な知恵であることを指し示している：

人の贈り物は、その人のために道をひらき、また尊い人の前に彼を導く。(18:16)

ダビデの苦闘から何を学ぶことができるでしょうか？

ダビデの信仰の苦闘は恥じることなく、私たちに希望を与えるために全てが聖書に記録されている。ダビデは、私たちと同様に悪い選択をする傾向があった。しかし、また、彼の物語は不完全な神の子に向けられる神の愛・・・と不完全さと悔い改める力は、神の議題に私たちを戻してくださることを教えている：

1. **準備：** 神は頻繁に人々が使徒となり、将来、神の栄光のために影響を与える人間となるように、人の心に触れられる。しかし、その後の人生で神から与えられる割り当てのために備えるために愛をもって、あえて多くの人々、選択(良しも悪しも)や課題をお用いになる。

2. **神のご臨在：** 神は常に、私たちの人生の歩みの中で、個人的な、絶えず臨在してくださる天の父なる神であられることを喜びとされる。たとえ私たちが神から漂流してしまい、我が道を行ってしまうような時でも、神は慈悲深く私たちに手を差し伸べ、再び接続して下さり、私たちが神の軌道の上に戻そうとしてくださる。

3. より深い問題： 時に、ダビデの深い恐怖と感情的な反応は、神について彼の頭の中で理解していたことがらを却下してしまった。神について知的な知識だけでは十分ではない。日々、私たちは、「逃れ」のために、自己中心と自己防衛の戦略に向かって引き寄せられることから維持するために日々の信仰の規律が必要である。

4. 慈悲： 神の慈悲は、常に、私たちの最大の失敗の上に功績をもたらしてくださる。私たちの選択肢には結果が伴います。しかし、神の私たちへの愛に拘束条件はない。神は、ダビデのような、めちゃくちゃな人間をも愛され・・・わたしたち一人一人も同様に愛してくださっている。失敗した時神を恐れてはなりません。謙虚さをもって神に走り、神の愛と忠実の内に再び避難所を見つけましょう。

5. 赦し： ダビデの究極の息子、イエス・キリストは、十字架の上で私たちの恥と罪を耐えてくださった。神の正義が満たされ、神の慈悲があなたに存分に流れるようになるために、罪の無い神の御子が支払ってくださった驚くばかりの価格についてじっくりと考えてみましょう。もはや、恥も罪も神から私たちを遠ざけることは出来ないのです。私たちは赦されたのです！

この後に続く章においてのダビデの失敗の数々は、これまで調査してきたものよりも更に深刻なものである。希望はあり・・・解決する：神を愛し、不完全さの中で神と共に歩むことは、あなたが下すことが出来る最良の決断である。その決断は（完璧な人生を送ることではなく）、あなたにダビデと同様、神の御心の人と呼ばれる資格が与えられる決断である。